

278169

書科教定國

中 初  
語 日

(五)

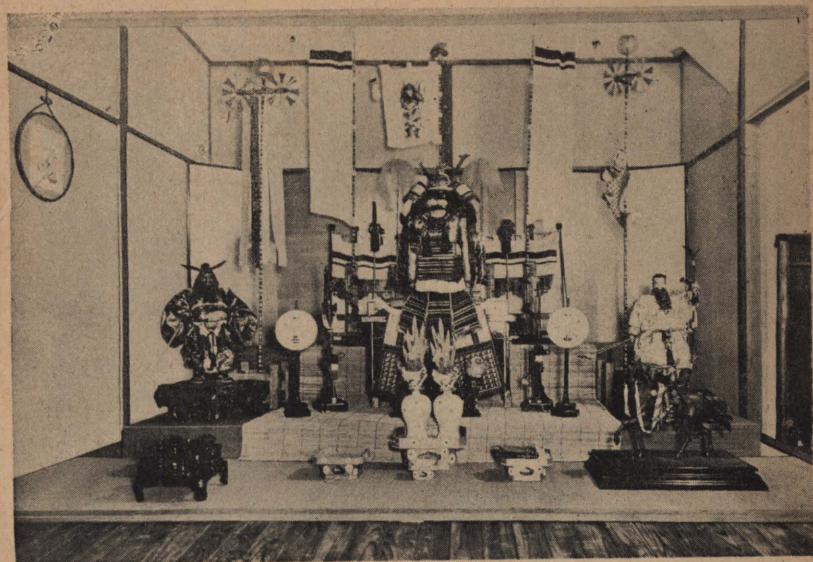


上海图书馆藏书



A541 212 0015 6873B





## 初中日語卷五編纂趣意

- 一、本書は初級中學第三學年第一學期用として編纂したものである。
- 一、每週百五十分(五十分授業三時限)を基準として編纂してある。
- 一、本書の題材は基礎となるべき標準語の習得に便ならしめるやうなものから取材したが、一面生徒の年齢に應じて興味あらしめるやうに留意した。
- 一、本書の假名遣はすべて歴史的假名遣に據つた。但し字音假名遣は發音通りに記してある。
- 一、學習者の便宜の爲卷末の附録に總譯を附しておいた。

# 目次

一、始業式……………	一
二、日本語の敬語……………	四
三、辯論大會……………	十一
四、長い道……………	十四
五、月と雲……………	十六
六、かぐや姫(一)……………	二十二
七、かぐや姫(二)……………	二十八
八、國民體育大會……………	三十二
九、講演の放送……………	三十六
十、山羊……………	四十三
十一、秋の終……………	四十六
十二、磁石……………	四十八
十三、潜水艦……………	五十一
十四、有望な青年……………	五十五
十五、雪舟……………	五十八
十六、來年は同じ年……………	六十五
十七、氷滑り……………	六十六
十八、日本の年中行事……………	六十九

## 一、始業式

今日は、始業式がありました。

朝九時に、学校の講堂にならびました。

私たちは、もう初級中學の最上級生です。

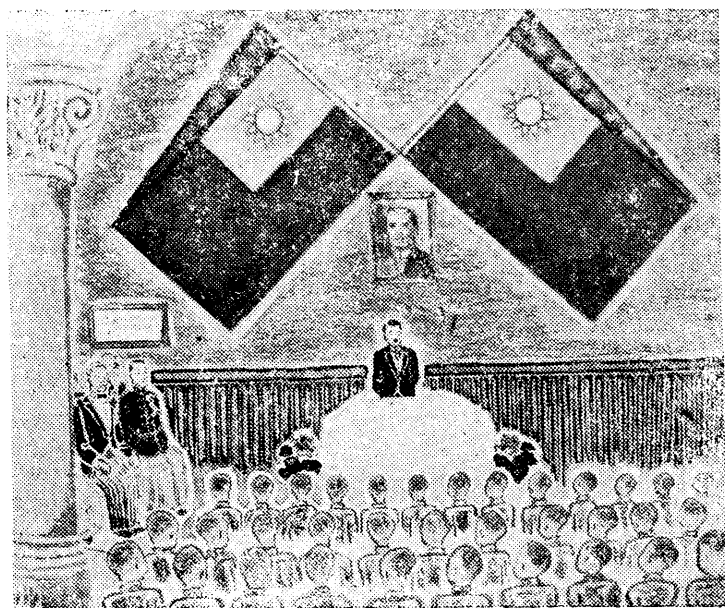
さう思ふと、何だかひきしまるやうな氣がしました。

正面にかけてある國父の肖像も、私たちをはげましていらつしやるやうに見えます。

新しい制服を着た一年  
生も、みんなうれしさ  
うな顔をしてならんで  
ゐます。

校長先生は訓話の時、  
私たち三年生に、

「三年生の諸君、諸君  
はもう初級中學の最  
上級生です。諸君は





下級生全體のにいさんとして模範をお示しなさい。」  
とおつしやいました。

私たちが入學したのは、ついこの間のやうな氣が  
します。

式が終つてから、私は周さんや陳さんと

「同級生みんなが一しよに勉強できるのもこの  
一年間です。今年もお互にしつかり勉強しませ  
う。」

と話し合ひました。

## 二、日本語の敬語

日本語の敬語には、色々な使方があります。

敬語の使方を全部覚えることは、たやすいことではありません。しかし、その主なものを覚えることは、そんなにむづかしいことではありません。

敬語には、大體三つの使方があります。

第一は、人を尊敬する時に使ふ言葉です。

次の例をごらん下さい。

弟がいひます。

先生がおつしやいます。

右の文の中で「いひます」と「おつしやいます」とは同じ意味の言葉ですが、人を尊敬して話す時には、「おつしやいます」といふ言葉を使ひます。この使方の例をあげてみませう。

弟が南京へ行きます。

おとうさんが南京へいらつしやいます。

弟はラジオ体操をします。

おとうさんはラジオ体操をなさいます。

生徒が歸ります。

先生がお歸りになります。

右の例の中で、「いらつしやいます」「なさいます」「お歸りになります」などは、皆人を尊敬したいひ方です。

第二は、自分が謙遜して使ふ時の言葉です。

次の例をごらん下さい。

私はすぐ行きます。

私はすぐ参ります。

「行きます」と「参ります」とは、同じ意味の言葉ですが、「参ります」は自分が謙遜していふ時に使ふ言葉です。

この使方の例をあげてみましょう。

私は弟に話します。

私は先生に申し上げます。

私は弟に手紙をやります。

私は先生に手紙をさし上げます。

とし子さんに鉛筆をもらひます。

をちさんに本をいただきます。

右の例の中で、「申し上げます」「さし上げます」「いただきます」などは、自分が謙遜していふ時使ふ言葉です。

第三は、品よくていねいに話す時に使ふ言葉です。

次の例をごらん下さい。

城門の外に湖水があります。

城門の外に湖水がございます。

右の文の、「あります」と「ございます」とは同じ意味の言葉ですが、「ございます」の方が、ていねいな言葉です。

この例をあげてみませう。

あの店で本を賣つてゐます。

あの店で本を賣つてをります。

あの人が山本さんです。

あの人山本さんでございませう。

右の例の「をります」や「でございませう」などは皆ていねいなひ方です。

敬語には、なほこの外に、

おうち、おかね、おちやわん、ごはん、ごほん、

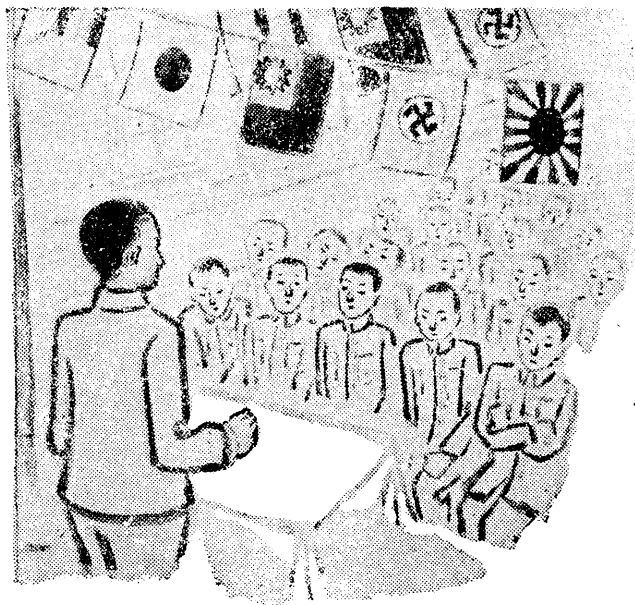
などのやうに單語の上に、おやごをつけるていねいなひ方もあります。又、「車屋さん」、「お医者さん」などのやうに、「さん」をつけるていねい



ないひ方もあります。

### 三、辯論大會

先生、その後お變りもございませんか。月日のたつのは早いものでございます。先生とお別れしてからも

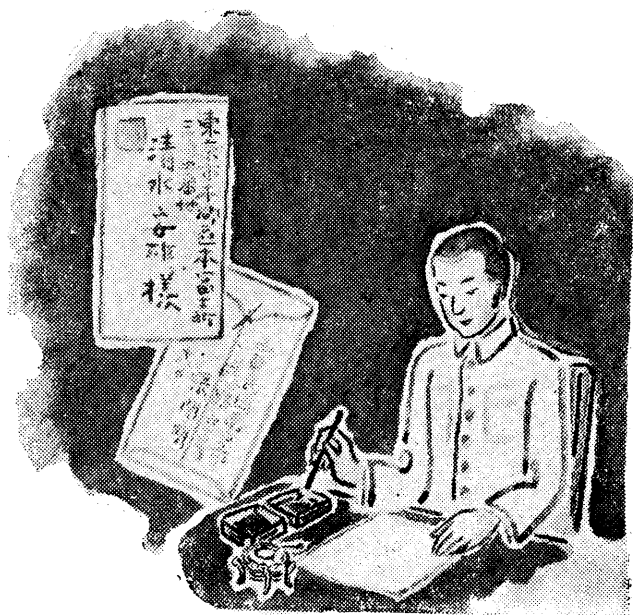


う半年になります。

昨日は、學校全體の辯論大會がありました。私たちの級からは、劉承德君と私が出ました。

私は「中學生の覺悟」といふ題で演説をしました。話が終ると、盛に拍手が起りました。演壇に立つて話してゐる間は平氣でしたが、その時ばかりは思はず顔が赤くなりました。

劉君は「日本と中國」といふ題でした。



劉君の演説は大へんよく出来たので、講堂は  
われるやうな拍手でし  
た。  
一年生や二年生も、元  
氣によくやりました。  
今年も先生が居られた  
ら、聞いていただけた

のにと思ふと、さびしくなりました。  
まだまだ暑さが續きます。  
どうぞ先生もおからだをだいじになさつてく  
ださい。

さやうなら

九月十八日

張 開 明

清水安雄先生

四、長 い 道

どこまで

行つても

長い道

夕日が赤い

森の上。

どこまで 行つても 長い道

ごうんと お寺の

鐘が 鳴る。





五、月と雲

月夜の晩でした。ある所で子供たちが五六人集つて影ふみをしてゐました。

どこまで行つても

長い道

もう 歸らうよ

日が暮れる。

そのうちに月に雲がかかりました。月は雲にはいつたかと思ふとすぐ出てきます。出たかと思ふと又すぐはいります。かうなつては影ふみも出来ません。

子供たちは遊ぶことをやめてしばらく月を見てゐました。すると一人の子供がいひました。

「あれはお月様が走つてゐるのだらうか、雲が走つてゐるだらうか。」

月は今雲から出て大急ぎで離れて行きます。

さうして次の雲の方へどんどん走つて行きます。

「お月様が走つてゐるのだよ。」

と一人の子供がいひました。

しかし、ちつと月を見つめてゐると、月は動かないで雲がとんで行くやうにも見えません。それで、

「お月様ではない、雲が走つてゐるのだ。」  
といふ子供もありました。



しはらくは  
「月が走る。」  
「雲が走る。」  
と大さわぎ  
でした。  
みんながわ  
いわいいいふ  
のを初めか  
らだまつて



聞いてゐた一人の子供がありました。

その子供は、この時みんなから離れて、前の方にある高い木のそばへ行きました。

さうして、しばらく木の枝の間から月を見てゐましたが、

「みんなここへ来てごらんなさい。雲が走るのか、お月様が走るのかよくわかるよ。」

といひました。みんなが木のそばへ来ました。

「ここへ立つて、お月様を木の枝の間から見て  
ごらんなさい。」

とその子供がいひました。

その通りにみんながしてみました。

すると、月は木の枝の間にちつとしてゐますが、  
雲はさつきと走つて行きます。

「わかつた、わかつた。走つてゐるのは雲だ。」  
とみんながいひました。

六、かぐや姫(一)

昔、竹取のおきなといふおぢいさんがありました。

毎日竹を切つて来て、

ざるやかごを作つてゐ

ました。

ある日、根もとのたい

そう光つてゐる竹を一

本見つけました。その



竹を切つて、わつて見ますと、中に小さな女の子がゐました。

おちいさんは喜んで、その子を手のひらに乗せて、うちへ歸りました。小さいので籠の中に入れて、おばあさんと二人で育てました。

この子を見つけてから、おちいさんの切る竹には、たびたび黄金がはいつてゐました。

おちいさんは、だんだんお金持になつていきました。

この子は、ずんずん大きくなりました。三月ほどたつと、もう十七八ぐらゐの娘に見えました。

光るやうに美しいので、家の中も明かるいほどでした。おちいさんは、この子にかぐや姫といふ名を見つけました。

世間では、光るやうに美しいかぐや姫のことを聞いて、

「むすこの嫁にしたい。」

「いや、うちへもらひたい。」

といふ人がたくさんありました。何ごとにもすなほなかくや姫でしたが、いつもおちいさんに、「私はどこへも参りたうございませぬ。」といつて、ことわつてもらひました。

かうしてゐる間に、何年かたちました。ある年の春の頃から、月の出る晩になると、かくや姫は月を眺めて、ちつと考へこむやうになりました。

秋になつて、月がだんだん美しくなりました。

八月の十五夜も近くなつたある夜、かくや姫は聲

をたてて泣きました。

おちいさんやおばあさんは、大さわぎです。

かくや姫は、

「なぜ泣くのか。」

と聞かれて、初めはだまつてゐましたが、しまひに悲しさうに答へました。

「私はもと、月の世界のものでございます。長い間おせわになりましたが、この十五夜には月の世界から迎へに参りますので、歸らなければ



なりません。私は、お二人にお別れするのが何よりも悲しうございます。」

これ聞いて、おちいさんもおはあさんもびつくりしました。

「それはたいへんなことだ。だが、迎へに来てもけつして渡さないから安心しなさい。」

とおちいさんがいひました。

おちいさんは、なんとかしてかくや姫をひきとめたいと思ひました。

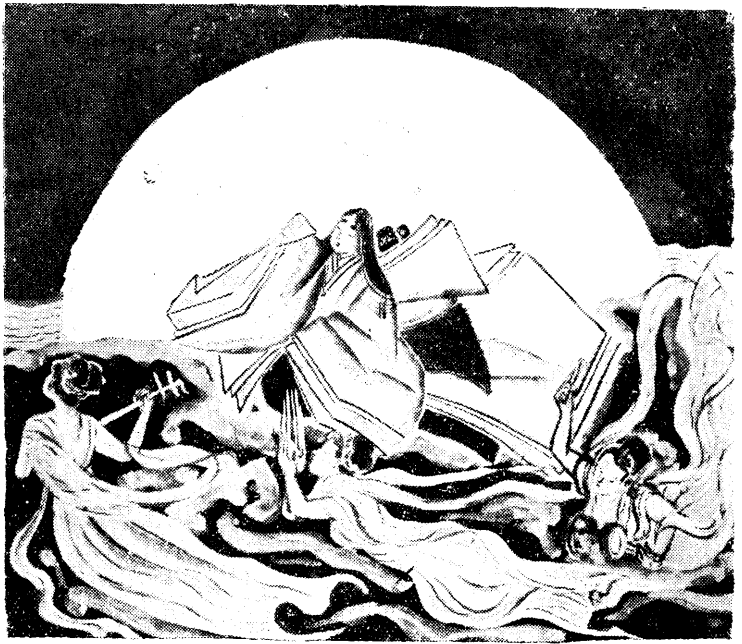
おちいさんは色色と考へた末、このことを殿様に  
申し上げました。殿様は、

「それは残念だらう。よし、その晚けらいたち  
をたくさんやつて、お前の家を守らせることに  
しよう。」

とおつしやいました。

七、かぐや姫 (二)

いよいよ十五夜になりました。おちいさんの家の



まはりを、弓矢を持  
つた殿様のけらいた  
ちが、いくへにもと  
りかこみました。  
おばあさんはしめき  
つた一間の中でしつ  
かりとかぐや姫を抱  
いてをります。おち  
いさんはその入口に

立つて番をしてをります。

夜中頃になると、急にお月様が十も出たかと思ふほど、あたりが明かるくなりました。

「さあ、来たぞ。」

と、殿様のけらいたちは、弓に矢をつがへましたが、ふしぎに手足の力がなくなつて、どうすることも出来ませんでした。

その時、大勢の天人が、雲に乗つて降りて來ました。すると、しめきつた一間の戸がひとりであ

きました。おばあさんの手に、しつかりとすがり  
ついてゐたかぐや姫のからだは、ひとりでに外へ  
出て行きました。誰の力でも、どうすることも出  
来ませんでした。かぐや姫は、おちいさんとおば  
あさんに、

「とうとうお別れしなければならぬ時が参り  
ました。お二人の御恩はけつして忘れません。  
どうぞ、月の夜には、私のことを思ひ出してく  
ださい。私もあの月の世界から、お二人を拜ん

でをります。」

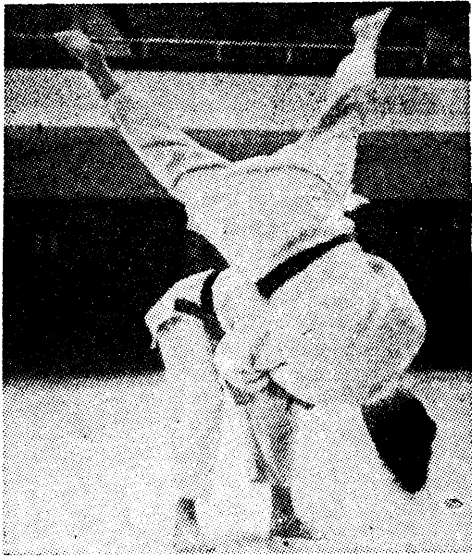
といつて、天人の用意して來た車に乗りましました。  
かくや姫を乗せた車は、大勢の天人にかこまれながら、靜かに天へ登つて行きました。

#### 八、國民體育大會

日本では、毎年十一月の初めに、國民體育大會が行はれます。

日本全國から、それぞれの地方を代表するすぐれ

た選手たちが集まります。  
さうして、色色の競技をします。



日本で昔から行はれてる  
剣道、柔道、弓道、相  
撲なども、もちろん、行  
はれます。陸上競技、水  
泳、野球、庭球、蹴球、  
籠球、排球、競漕、その  
ほか、あらゆる競技が行

はれます。

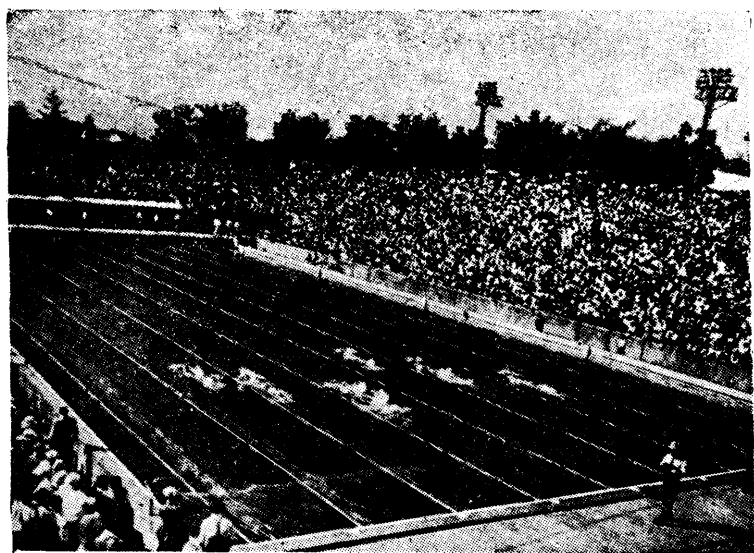
競技はたいてい明治神宮の外苑で行はれます。

廣い外苑には、設備の整つた競技場があります。

場所は、明治天皇をお祀りした尊いお社の外苑です。しかも、りつばな設備の競技場です。

そこで競技するのは、選手にとつてたいへん名譽なことです。各地から集まつた選手たちは、全力をあげて競技をします。





大會は、一週間も十日も続きます。又、何萬人といふ大勢の人が、見物に行きます。遠い所の人はラジオの放送によつて、その様子を知ります。

國民體育大會は日本

國民全部が、待ちに待つてゐる大會です。

### 九、講演の放送

夕飯の時、妹が、

「今夜は、をちさんの放送がある筈でしたね。」  
といひました。

「ああ、さうさう忘れてゐた。をちさんはどんな講演をなさるだらう。聞かう、聞かう。」  
と、弟が大きな聲でいひました。

「信ちゃんには、聞いてもわかりませんよ。きつとむづかしいお話だから。」

と、妹がいひますと弟は、

「たいていわかるよ。よく聞いておいて、あとでをちさんに、上手な所と下手な所を話してあげよう。」

と、いひました。

「まあ、熱心な應援ね。」

といつて、おかあさんがお笑ひになりました。

夕飯が終ると、おとうさんが、

「今夜は、みんなでラジオを聞かう。」

とおつしやつて、ラジオのそばに、お坐りになりました。私たちも皆、ラジオの前に坐りました。子供の時間の放送がすみ



ました。

いよいよ、をちさんの講演です。

「講演でございます。農事試験所技師高橋タカ實ヘシ氏ソノルが、『農業の今日及び将来』といふ題でお話しになります。」

續いてをちさんの聲が、聞えてきました。

「私は、ただ今紹介していただいた高橋であり  
ます。しばらくの間、『農業の現在及び将来』  
の問題について、お話をいたさうと存じます。」

をちさんは、ゆつくりお話をはじめました。  
私たちにお話をしてくださるいつものをちさんと



は、ちがふ人のやうな氣が  
します。  
をちさんのお話は、三十分  
近く續きました。むづかし  
いお話なので、わからない  
こともありました。が、たい  
へん爲になるお話でした。

をぢさんのお話のうちで大切なことは、次のやうな點です。

「今日の農業は、科學の進歩によつて非常に發達しました。耕作の方法についても、肥料の點でも、病害を除くことについても、科學的研究によつて、非常に進歩してゐます。機械を利用することによつて收穫も増して來ましたが、なほ一そう科學的な研究を盛にしなければなりません。しかし、農業の發達は、ただ科學の力だ

けにたよることは出来ません。

眞に農業を愛し、骨身を惜しまず働く心構へが、何より大切であります。

科學の力を利用すると共に、昔からの素直な農民の心、勤勉な精神を、失はないやうにつとめねばなりません。」

をぢさんのお話が終つた時、おとうさんは、

「なかなかいい話だつたね。」

と、おつしやいました。弟は、



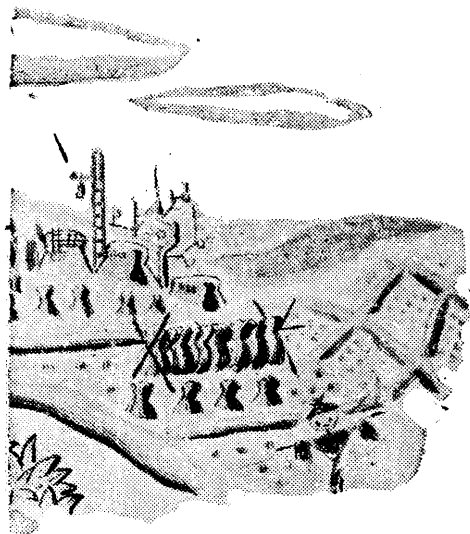
「むづかしくてよくわからなかつた。しかし、  
をちさんはなかなか放送が上手だ。僕は安心し  
た。今度をちさんに會つたら、ほめてあげよう。」  
といひましたので、みんなが大笑ひをしました。

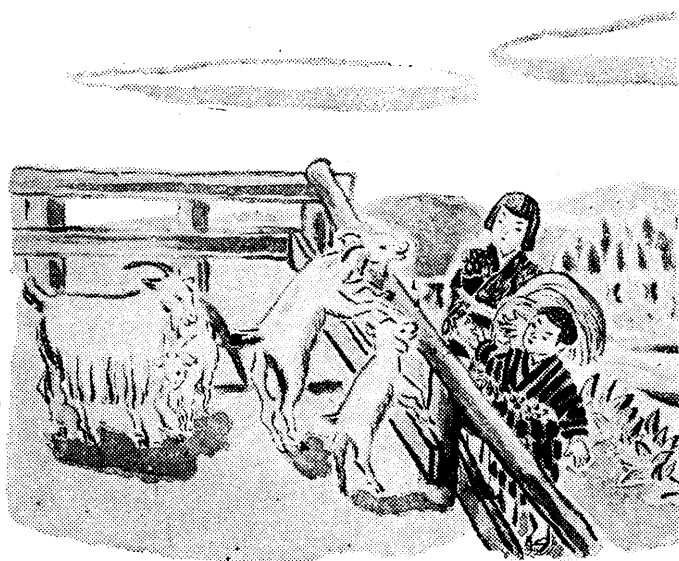
## 十、山 羊

私のうちでは稲刈りがすみましたので、たんぼに  
柵を作つて、山羊の運動場をこしらへてやりまし  
た。

今朝も、私は朝早く起きて、山羊をたんぼに出してやりました。親山羊と二匹の子山羊は、うれしさうに草をたべてゐます。

この親山羊は、去年のちやうど今頃、汽車に乗せられて遠い所から来たのです。あれからもう一年たちました。





今年の春この二匹の小山羊が生まれました。子山羊が生まれると、親山羊のお乳かたくさん出たので、おとうさんは、お乳をしぼって私たちにも飲ませてくださいました。夏休みが終る頃は、小

山羊も乳を飲まなくなり、みるみる大きくなりま  
した。

山羊はほんたうにかはいい動物です。いつまで見  
てゐてもあきません。ぼんやり山羊を見てゐると、  
「道子はほんたうに山羊がすきだね。」  
といふ聲がしました。ふり向くと、私の後におと  
うさんがたつていらつしやいました。

十一、秋の終

あんなに高い青い空。

風はどこから

来るのだらう。

かさかさ木の葉が

音をたて

風の吹くたび

散つて来る。

あんなに高い青い空。



冬はどこから来るのだらう。

落葉のたまつた庭の隅

一つ咲いてる白い菊。

十二、磁石

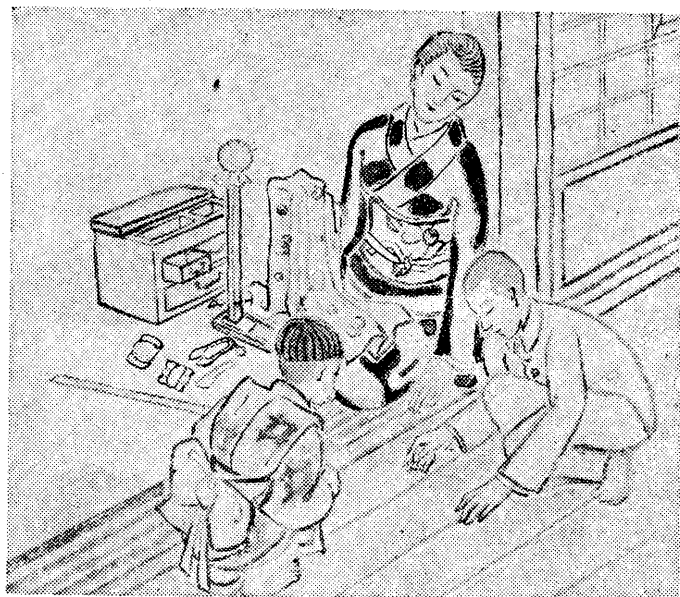
ねえさんが裁縫をしてゐると、針が床の上に落ちました。針は板と板のすきまに落ちました。

ねえさんはびんのさきで取らうとしましたが、すきまが狭いのでなかなか取出せません。

私はふと、この間買った  
磁石のことを思ひ出しま  
した。

急いで取つて来て、針の  
そばへ持つて行きまし  
た。

すると、針はびよんとと  
び上つて、磁石にくつつ  
きました。

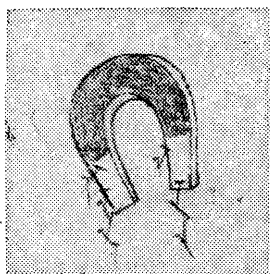


ねえさんは大へん喜んで、

「ありがたう。いいことを知ってるますね。」といひました。そこへ弟が来て、

「にいさん、ちよつとそれを貸してください。」といつたので、貸してやりました。

弟は磁石で色々なものを吸ひつけて遊んでゐました。鐵釘や小刀、針や鋏、何でも面白いほどよく吸ひつきます。しかし銅の釘は、いく





らそばへ磁石を持つて行つても吸ひつきません。  
弟がふしぎに思つて、私にたづねましたから、  
「磁石は鐵やニッケルは吸ひつけるが、銅やし  
んちゆうやアルミニウムは吸ひつけない。」と  
いつて教へてやりました。

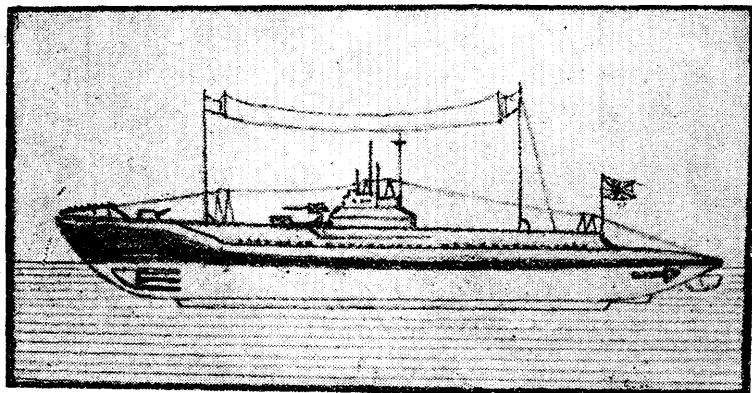
### 十三、潜水艦

昔カラ、船トイヘバ皆水ノ上ヲ走ルモノトキマツ  
テキマシタ。シカシ、今デハ潜水艦トイフモノガ

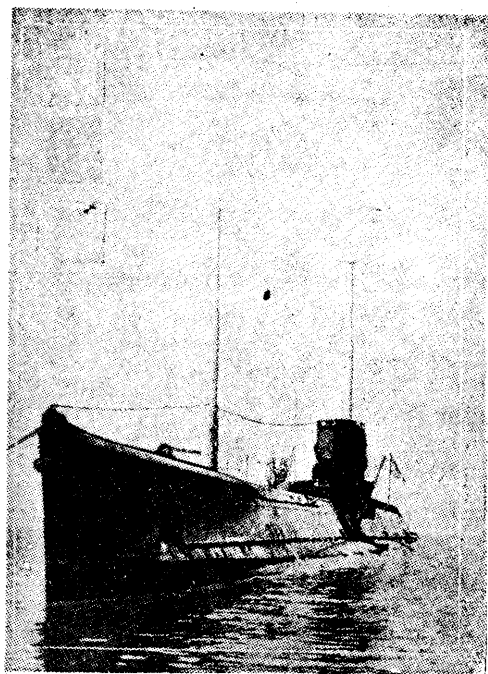
ア  
リ  
マ  
ス  
。

潜  
水  
艦  
ハ  
水  
ノ  
中  
ニ  
潜  
ッ  
テ  
敵  
ヲ  
攻  
撃  
ス  
ル  
軍  
艦  
デ  
ス  
。

潜  
水  
艦  
ト  
イ  
ッ  
テ  
モ  
、  
水  
ノ  
中  
ニ  
バ  
カ  
リ  
キ  
ル  
ノ  
デ  
ハ  
ア  
リ  
マ  
セ  
ン  
。  
フ  
ダ  
ン  
ハ  
、  
ナ  
ル  
タ  
ケ  
水  
ノ  
上  
ニ  
出  
テ  
キ  
マ  
ス  
。  
時  
時  
新  
シ  
イ  
空  
氣  
ヲ  
入  
レ  
ナ  
ケ  
レ  
バ  
ナ  
リ  
マ  
セ  
ン  
シ  
、  
又  
水  
面  
ニ  
浮  
カ  
ン  
デ  
キ  
ル  
方  
ガ  
早  
ク  
走  
レ  
ル  
カ  
ラ  
デ  
ス  
。



サウシテ、敵ニ近ヅイタ時ニハ、水ノ中へ潜ッテ  
敵ニ見ツケラレナイヤウニシマス。潜水艦ハ、廣  
イ大洋ヲヒトリデ乗切ルコトモ出來マス。又、一



日中海ノ中ニ潜ッ  
テキルコトモ出來  
マス。  
潜水艦ガ水ノ中ニ  
潜ッテキル間ハ、  
潛望鏡トイフ長イ

管ヲ使ヒマス。ソレヲ水ノ上ニ出シテオケバ、四方ヲ自由ニ見ルコトガ出來ルノデス。

潜水艦ハ敵ノ軍艦ニ近ツイテ、魚雷デウチ沈メマス。時ニハ敵ノ港ノ中ヘシノンデ行ッテ、不意ニ敵ヲ襲フコトモアリマス。又、弱イ敵ニ對シテハ、水ノ上ニ浮カンダママ、大砲ヤ魚雷デウチ沈メルコトモアリマス。

潜水艦ノ一番恐シイ敵ハ、飛行機ト驅逐艦デス。飛行機ニ見ツケラレ爆彈ヲ落サレタリ、速力ノ速

イ驅逐艦ニ追ヒカケラレタ時ハ、タイヘン危険デ  
ス。又敵ガ海ノ中ニ、太イ針金ノ網ヲ張ルコトガ  
アリマス。ウツカリソレニカカルト、魚ノヤウニ  
イケドリニサレテシマフコトモアリマス。

#### 十四、有望な青年

ある會社で社員を募集しました。志望者は五十人  
ばかりもありましたが、支配人はある一人の青年  
を採用しました。

その青年の外に知名の人の紹介状を持つて來た者や、りつばな學歴のある者も大勢ありました。

ある人が支配人に向かつて、

「どういふお見込であの青年を採用なさつたのですか。」

とたづねました。支配人は、

「あの青年が、私の部屋へはいる時もある時もある、戸のあけたてが静かで落着いてゐました。話してゐるうちに一人の老人がはいつて來ました

が、その青年はすぐ立つて席を譲りました。  
挨拶をしてもていねいで、少しもなまいきな所  
がなく、何を聞いても、い  
ちいちのはつきり答へて、  
しかもよけいなこと  
はいひません。齒も  
よく磨いてありま  
したし、爪は短く  
切つてゐました。



最後に私が、『どんな仕事につきたいと思ひますか。』と聞くと、『何でもけつこうです。ただ最も骨の折れる仕事に、つけていただきたいと思ひます。』といひました。

態度を見ても考へを聞いても、この人は有望な青年だと思ひました。』  
といひました。

十五、雪舟



雪舟が子供の時の話です。

お寺の小僧になつて間もない頃、或日和尚さんに大そう叱られました。

「お前は又畫をかいてゐるのか。いくらいつても畫ばかりかいて、ちつともお經を覺えない。

お前は口でいつて聞かせるだけではだめだ。」  
かういひながら、和尚さんは雪舟をひつばつて、本堂へ行きました。

雪舟は大きな柱にしばりつけられました。

初めはただ恐しさで一ばいでしたが、さびしい本堂の柱にしばりつけられてちつとしてゐる間に、雪舟は色色と考へ續けました。

「わたしはいつもお經を讀まうと思ふのだが、机に向かふと、つひ畫がかきたくてかきたくてたまらなくなつてしまふ。明日からはきつと一生懸命にお經を習つて、早くえらい坊んにならう。」

わたしがここでこんなに叱られてゐようとは、

おとうさんもおかあさんも、夢にも思つていらつしやらないだらう。」

こんなことを考へてゐると、雪舟は悲しくなつてとうとう泣出してしまひました。涙がとめどなくこぼれました。ぼたぼたと落ちた涙は、本堂の板の間をぬらしました。

少し泣きつかれて、ぼんやり足もとを見てゐた雪舟は、何氣なく足の親指で板の間に落ちた涙をいちつてみました。

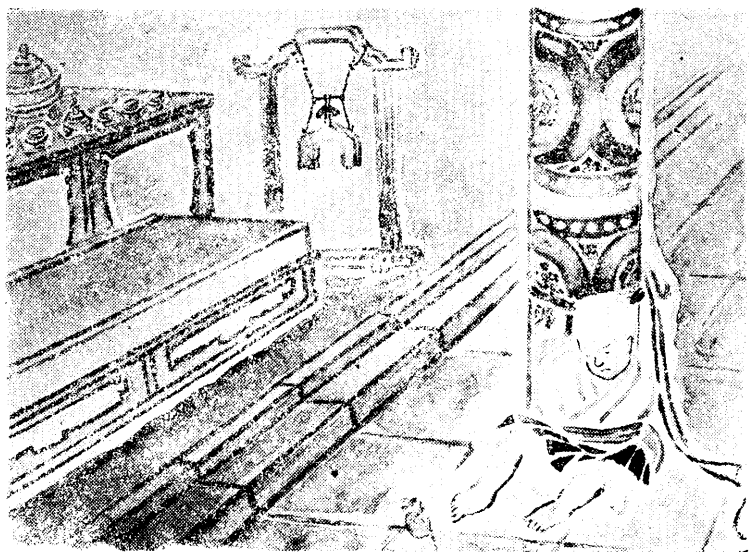
すると、今まで悲しさうだつた雪舟の顔は、だんだん晴れやかになつて來ました。

雪舟は足の親指を使ひながら、涙で板の間に畫をかき始めたのです。

自分の部屋へ歸つてゐた和尚さんは、しばらくすると雪舟がかはいさうになりました。もう許してやらうと思つて又本堂へ來ました。

夕方近い本堂は少し暗くなつてゐました。どんなにさびしからうと思つて、ふと見ると、び

つくりしました。大きな  
ねずみが一匹、雪舟の足  
もとで今にもとびつきさ  
うな様子です。かまれて  
はかはいさうだと思つて  
和尚さんは、「しっしっ」  
と追ひましたが、ふしぎ  
にねずみはちつとして動  
きません。近づいて見る



と、それは生きてたねずみではありませんでした。

雪舟が板の間に、涙でかいたねずみでした。

和尚さんは驚きました。急いでなはをといてやりました。さうして、

「わたしが悪かった。お前は畫かきになるがいい。これほどお前が畫が上手だとは、今まで知らなかつた。」

といひました。雪舟はにつこりしました。

其の後、雪舟は一心に畫を習ひました。學問も勉

強しました。

雪舟はとうとう日本一の畫かきになりました。

十六、來年は同じ年

八歳になる子供がありました。

或る人が、隣へ引越して來ました。その家の子供とすぐ仲好しになりました。

「君はいくつですか。」

「僕は七つです。」

「七つですか、それなら來年は、僕と同じ年に  
なりますね。」

十七、氷滑り

冬休みなので、にいさんと山中湖へ來ました。

今朝は風もなくおだやかな天氣です。朝早く起き  
て、氷滑りに行きました。

湖へ來るともう人が大勢來てゐました。鏡のやう  
な湖の上を、黒い影が縦横に走つてゐます。まだ



日は出ません。  
よく見ると、宿  
であつた人も二  
三人来てゐまし  
た。私たちは一  
しよに元氣よく  
滑りました。



腕を後に組んでからだをかがめ、矢の様に早く走  
つてゐる人もあります。



兩手をひろげ片足で滑りながら、大きく輪を畫いてゐる人もあります。

しばらく滑つてゐると、からだ中がぼかぼかとあつくなりしました。

「ああ、朝日だ。」

と誰かがさけびました。急に明かるくなりました。朝

日がさして來ました。美しい朝日です。

雪におほはれた眞白い富士は、朝日を受けてはら  
色に輝いてゐます。

私たちはあまりの美しさに、滑るのを忘れて眺め  
てゐました。

### 十八、日本の年中行事

年中行事は、どこの國でも、それぞれの風俗習慣  
をあらはしてゐるものです。

大きくはその國によつて異り、小さくはその土地によつて異り、従つて皆特色を持つてゐます。これ等の年中行事はそれぞれの國で、昔から傳へられて來たものですが、又新しいものが定められる場合もあります。

日本にも色色な年中行事がありますが、主だつたものをあげてみませう。

元旦には神社に參拜し、家中で雑煮をたべ、屠蘇を飲んで新年を祝ひます。

門松の飾られた町を、年賀の客が賑かにゆきまします。親類や友達と年賀状のやりとりをするのも新年の楽しい行事です。

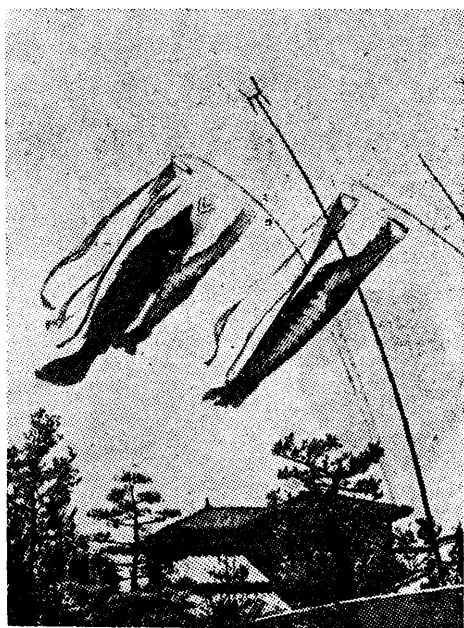
二月の節分には豆まきをします。一福は内、鬼は外。」と大聲で叫びながら豆をまくと、子供たちがおほよろこびで拾ひ廻ります。

三月三日は桃の節句で、女の子の待ちどほしい日です。雛壇に雛人形を飾り、その前でたのしく遊びます。女の子の様子は見る目も嬉しさうです。

春分と秋分の前後一週間を、それぞれ「春の彼岸」  
「秋の彼岸」といひ、どの家でも祖先の靈をまつ  
ります。お寺では盛大な佛事が行はれ、參詣の人  
でにぎはひます。

櫻の國といはれる日本だけあつて、いたる處に櫻  
の名所があります。櫻が咲くと、どこもかしこも  
花見の人で賑かです。

五月五日は端午の節句で、男の子のために武者人  
形を飾り、柏餅やちまきを供へます。鯉幟が青葉



の上に勇ましく翻ります。

六月にはいると田舎では田植が始まります。

田植歌を歌ひながら、男も女も打まぢつて田植をします。植ゑた苗

がのび揃ふ頃からは、螢が飛始めます。

七月七日は七夕です。五色の紙に和歌などを書き、竹の枝に結びつけて星祭をします。

七月十五日は盂蘭盆です。家には美しい燈籠をともし、先祖のお墓にお詣りします。寺や神社の廣場等に、大勢の人が集まります。笛や太鼓に調子を合はせて、盆踊をします。

九月にはいると、そろそろ稻刈りが始まり、秋の取入れの忙しさが、しばらく続きます。舊曆八月十五日の中秋の月見も、秋の主な行事です。町や村の神社の秋祭が行はれるのも、この頃です。町は幟や提燈で飾られ、その間を御輿がねり廻る。



のです。

十月と十一月は菊の盛りで又紅葉の見頃です。

いよいよ年末になると、せはしくなります。どの家でも煤拂ひをして家をきれいにしたり、餅をついたり、門松をたてたりして新年を迎へる準備をします。

日本と中國とは、同じ東亞の國ですから、日本の年中行事には、中國の行事と共通のものが少くありません。

## 附錄

初中日語(五)譯註

### 一、開學式

今天舉行了開學式。

早上九時排列在學校的講堂裏。

我們已是初級中學的最上級生了。

這樣一想，不覺感到一種緊張的情緒。

正面掛着的國父孫中山先生的肖像，也好像露着鼓勵我們的神氣。

穿着新制服的一年級生，也都顯着快樂的臉龐排列着。

「三年級生諸君，諸君已是最上級生了！諸君就作為全體下級生的哥哥似的做一下模範吧！」

校長先生訓話的時候對我們說。

我們入學好像覺得是前幾天的事情似的。

儀式完了以後，我就和周君及陳君互相講過。

「同級生大家能夠一同用

功，也只在這一年之中，今年我們還是努力用功吧！

## 二、日本語的敬語

在日本語的敬語中，有各種的用法。

要將敬語的用法完全學會，這倒不是容易的事情，但是，要將它的主要地方記住，那不是怎麼困難的事。

敬語大概可分三種用法：

第一是在尊敬人的時候用的言語。

請看下面的例：

「弟弟說（弟がいひます）  
「先生說（先生がおつしやいます。）

右面文中的「いひます」與「おつしやいます。」雖然是意思相同的言語，但是在尊敬人而說話的時候，須用「おつしやいます。」

這句話。

現在舉這種用法的例子看吧：

「弟弟到南京去。」（弟が南京へ行きます。）  
「爸爸到南京去。」（お父

さんが南京へいらつしや  
います。( )

「弟弟是做無線電體操。」  
(弟はラジオ體操をしま  
す。)

「爸爸是做無線電體操。」  
(お父さんはラジオ體操  
をなさいます。)

「學生回去。」(生徒が歸  
ります。)

「先生回去。」(先生がお  
歸りになります。)

在後面例中的「いらつしや

います。」「なさいます。」

「お歸りになります。」等、

都是尊敬人的說法。

第二是自己謙讓時所用的話。

請看下面的例：

「我馬上就去。」(私は直  
ぐ行きます。)

「我馬上就去。」(私は直  
ぐ參ります。)

「行きます。」和「參ります。」

雖是意思相同的話、但是「參  
ります。」是自己謙遜時所

用的話。

現在舉這樣用法的例子吧：

「我告訴弟弟。」（私は弟に話します。）

「我告訴先生。」（私は先生に申し上げます。）

「我寄給弟弟信。」（私は弟に手紙をやりまします。）

「我寄給先生信。」（私は先生に手紙をさし上げまします。）

「問淑子小姐要鉛筆。」（とし子さんに鉛筆をもらひます。）

「問叔父要書。」（おぢさん

んに本をいただきまします。）

右面例中「申し上げまします。」

「さし上げまします。」「いただきます。」

「等，是自己謙遜時所說的話。」

第三是很文雅恭敬地說話時

所用的話。

請看下面的例：

「城門的外面有湖。」（城門

の外に湖水があります。）

「城門的外面有湖。」（城

門の外に湖水がございま

す。)

右文的「あります。」和「ございます。」意思雖然相同，但是「ございます。」這方面來得恭敬客氣。舉一舉這種例看吧：

「那個舖子裏賣書。」(あの店で本を賣つてゐます。)

「那個舖子裏賣書。」(あの店で本を賣つて居ります。)

「他就是山本君。」(あの人が山本さんです。)

「他就是山本君。」(あの人が山本さんでございます。)

右例的「居ります。」和「ございます。」等都是恭敬而客氣的說法。

敬語除此以外，再有如府上(おうち)，錢(おかね)，茶碗(おちやわん)，飯(ごはん)，書(ごほん)在單語上附着「お」「ご」的恭敬的用法。又有如：「車屋さん(車夫)，「お

醫者さん（醫生）等附着「さん」的恭敬而客氣的用法。

### 三、辯論大會

先生！一向很平安嗎？光陰過得很快，自從與先生分別以來，已有半年了！昨天開了全校的辯論大會。我們的級裏，由劉承德和我參加了。我以「中學生的覺悟」爲題演說了。講完了後，起了很盛大的拍手聲，站在講壇上說話的時候，雖然很從容，

但就在那時不禁也紅了臉。

劉君的題目是「日本和中國。」因爲劉君演說得非常好，所以拍手的聲音，好像要把講堂震壞了似的！

一年生和二年生，也講的有精神，又精彩。若是今年先生還是在這裏的話，不也可以請您聽了嗎？

這麼一想，覺得淒涼得很！熱的時候還很長，請先生珍攝珍攝身體吧！再會！

九月十八日 張開明

清水安雄先生

#### 四、長的路

無論你去到何處？

儘是長的路！

紅色的夕陽，

高掛在樹梢！

無論你去到何處？

儘是長的路！

「鐘！鐘！」

寺鐘鳴着！

無論你去到何處？

儘是長的路！

歸去吧！

已是將暮之時！

#### 五、月和雲

是一個月夜的晚上，在某處有五六個孩子在一起，作着踏影的遊戲。

在那時，月亮忽然被雲遮住了，剛一想到月亮進了雲裏了而它立刻又出來了！剛一出來了，它又立刻進去了！這樣一來，踏影的玩意兒，也就不能再做了。孩子們就停止了遊戲看了一會兒月亮。於是，一個孩子說：



「那是月亮在走着呢？還是雲在走着呢？」  
月亮現在從雲裏出來，很快的離開，而又向別的雲裏飛也似的跑去。

「是月亮在走着哪！」  
一個孩子說。

但是仔細地將月亮凝視一下，又像月亮不動而雲在飛走着的樣子。於是，也有孩子說：

「不是月亮，是雲在走着呢！」

「月在走！」  
「雲在走！」

的大聲吵了一會。  
有一個孩子，一直靜聽着大家「嘩啦嘩啦」的吵鬧。這時這個孩子就離開了大家，走到前面高樹的旁邊去，而從樹枝中間看了一會月亮，就說：

「諸位！請到這邊來看呀！就可以明白究竟是雲走呢？月亮走呢？」

大家就到樹旁邊去了。

「請立在這裏從樹枝中看月亮吧！」

那個孩子這樣說。大家就照着他的話做去，於是，就看見月亮在樹枝間不動，而雲正在很快的跑過去。

「明白了！明白了！走着的是雲呢！」

大家這樣說了。

### 六、かぐや姫(一)

從前有一個老公公，名叫採竹老翁，每天把竹子採來，做竹籬和竹籃。有一天他發見了一枝根上很有光亮的竹子，將那竹子劈開來一看，

裏面有一個小女孩。

老公公就很歡喜地將那個孩子放在手掌上帶回來了。因為太小了，就把他放在竹籃中和老婆婆一同把她養育起來了。

自從發見了這個孩子之後，老公公所劈的竹子中時常發現有黃金藏在裏面。老公公漸漸的闊起來了。這個孩子很快地長大了。大約過了三個月之後，看起來就好像十七八歲光景的姑娘了。

因爲漂亮得好像光輝耀目似的，所以甚至屋裏也增加了光輝，老公公就替這個孩子起了一個名字，叫かぐや姫。人們聽到了好像光輝耀目似的很漂亮的かぐや姫的事情，有很多的人都來說：「希望娶她做兒媳婦」，「不，我家裏要娶的。」雖然是不論何事都很柔順のかぐや姫，但老是對老公公說：

「我什麼地方都不想去。」

請他回絕了他們。

就這樣地經過了幾年工夫。自從有一年春天的時候起，一到有月亮的晚上，かぐや姫就望着月亮，默不作聲的想心事。到了秋天月亮漸漸的美麗了。在近八月十五夜的某晚上（突然）かぐや姫放聲哭起來了。老公公和老婆婆就很慌張起來了。かぐや姫被問了。

「爲甚麼哭呀」

之後，起初沒說什麼，但終於很悲傷的回答道：

「我本是月亮世界的人了，一向受了兩位老人家的照管之恩，但是因爲在這十五日的夜裏，月亮世界來接我了，不能不去的，離別二位老人家是比任何事都來得悲傷啊！」

聽見這個，老公公老婆婆都吃了一驚，

「可不得了啦，但是即使來接你，也決不會讓你去的，放心吧！」

老公公說。

老公公於是就想，要設法把かぐや姫留住。

老公公經過了種種的考慮的結果，就將這事稟告了國王（諸侯之一），國王說，

「那是很可憾的事吧！好！那末在那天晚上我多派一點部下的兵，來守衛你的家吧！」

### 七、かぐや姫(二)

已到了十五日的晚上，老公公家的四周，被拿着箭的國王部下，重重圍住了，老婆

婆在一間緊閉着的屋子裏，用力的抱着かぐや姫，老公公立在門口看守着。

到了午夜光景的時候，突然月亮好像出來了十個似的，附近變得很亮，

「喲來了喲！」

國王的部下，雖然把箭上了弦，但是奇怪得很，手足的力都變了沒有了，什麼事也不能做了。

那時很多的天神，乘了雲下來了，這時緊閉着的門，就

自然而然的開了。

緊緊靠着老婆婆手臂のかぐや姫的身體，也自然而然的出去了，無論如何誰的力量，也是無能爲力的，かぐや姫就和老公公老婆婆說

「終於到了不得不分離的時候了，二位老人家的大家恩我決不會忘掉的，請在出月亮的晚上，回憶起我吧！我也從那月亮世界，要拜禱你二位老人家。」

說完就坐上了天神所預備的

車子。かぐや姫所乘的車子，被很多的天人包圍着，慢慢的登上天去了。

### 八、國民體育大會

日本在每年十一月初時，有國民體育大會，從日本全國聚集代表各地方的優秀選手，而作種種的比賽。日本自古有的，劍道柔道弓道相撲等，也當然舉行的。田徑賽，游泳，棒球，網球，足球，籃球，排球，賽船，及其他一切比賽，都是舉行的。比賽

是多半在明治神官的外苑舉行的。廣大的外苑上，有設備完善的運動場。地方就是祭祀明治天皇尊貴的神堂的外院，並且是很壯美的，設備完善的運動場。能夠在這種地方比賽，這是對於選手，是很榮譽的事情，來自各地的選手們，都拿出全力來參加比賽。大會繼續開一星期或十天那麼長的工夫。還有，有好多萬的人去參觀，遠地方的人，就由無線電播

音就知道那種情況。國民體育大會，是所有的日本國民，所切望着的大會。

### 九、廣播演講

晚飯時妹妹說：

「今天晚上，有叔父的廣播，是不是？」

「呀！是！是！倒忘記了！」

叔父要演講的是甚麼呢？

聽吧！聽吧！」

弟弟大聲地說。

「信兒就是聽了也不會明白的，一定是很深奧的話

吧！」

妹妹說，於是弟弟就說：

「大概明白的，好好地聽了以後，等一會再將講的好好的地方，和不好的地方告訴叔父。」

「啊！你真是熱心幫着叔父啊！」

這樣說着，媽就笑起來了。

吃完晚飯，爸爸說：

「今天晚上，我們大家聽無線電吧！」

他就坐在無線電的旁邊了。

我們也在無線電的前面坐了。兒童節目的廣播完了，現在要到叔父演說了。

「現在是廣播演說，農事試驗所技師高橋實先生演講，題目是『農業之今日與將來。』」

接着就聽到叔父的聲音了。

「我是剛纔介紹過的高橋，我現在關於『農業之現在及將來』的問題，稍微說一說，」

叔父不慌不忙的開始演講了。

說話的聲音有些感到不像常常與我們講話的叔父了。

叔父所講的話，大約繼續了三十分鐘，因為是很深的問題，所以也有不明白的地方，不過還是很有益的講演。

叔父所講的中間，最重要的就是如下列的諸點：

「現在的農業，由於科學的進步，而非常的發達，不論是關於耕作方法或是肥料問題，或者關於免除病害的問題，都因科學的



研究，而非常進步。因為利用機器，收穫也增加了，但還須更盛大的研究科學不可。然而農業的發達是不能只依靠科學的力量，要有真心愛農業，不怕艱苦的工作，這種態度比什麼都來得重要。利用科學的力量，同時要不失古來樸誠的農民心理和勤勉的精神纔好。——

叔父講完了的時候，父親就說：

「真是有意義的講演啊！——太難了，我不大明白，可是叔父真會廣播啊！我放了心了，下回見了叔父，我誇獎他吧。」

因為弟弟這樣說了，大家就大笑起來了。

### 十、山羊

在我的家裏，因為割稻已經完畢了，所以在稻田裏作了柵欄，替山羊造了一個運動場。

今朝我又很早起來，將山羊

放到稻田裏去了，母羊和二頭小山羊，便很快樂的吃着草。這頭母羊，是去年正巧這個時候，從遠處乘了火車來的，從那時候已過了一年。今年的春天，生了這兩頭小羊。小山羊生了以後，因為母山羊的奶乳，生得很多，於是父親擠出奶來，讓我們也喝了。

在暑假將完的時期，小山羊也就斷了奶，眼看着愈長愈大了。

山羊真是可愛的動物，看到什麼時候也看不厭。正在呆呆地看着山羊的時候「道子真是很喜歡山羊啊！」聽見這樣的聲音，回頭一看，原來父親站在我的後面。

### 十一、暮秋

青的天空，  
是那麼樣的高！  
是何處吹來的風啊？  
樹葉颯颯地響着，  
風吹過處，  
掉下來了！

青的天空，  
是那麼樣的高！  
是何處帶來了冬天？  
堆滿了落葉的  
院子的角落裏，  
生着一朵，  
白色的菊花。

## 十二、磁石

姊姊正在做針線的時候，忽然將針掉在地板上了，針就掉在板縫裏去了。  
姊姊就拿頂釘的頭，想把牠取出來，但是因為板縫太細

了，所以很不容易取出來。  
我忽然想起前幾天買的一塊磁石，連忙拿來放在針的附近。這麼一來針就「擦」的一跳，吸在磁石上了。  
姊姊便很喜歡地說。

「謝謝！你到知道很巧妙的法子啊！」

那時弟弟來說：

「請把那個借給我用一用」  
我就借給他了。弟弟便用磁石吸引種種的東西玩着。不論鐵釘和小刀啊，針和剪刀啊，

都很有趣地吸引得起來，但是銅釘是無論怎樣的，把它放磁石的附近，總是不能吸起來。因為弟弟很覺奇怪的問我，所以我就教給他說：「磁石雖然能吸引鐵和鎳等，但不能吸引銅和黃銅或鉛等。」

### 十三、潛水艦

自古以來，凡是船隻，都是在水上行走的東西，但是現在有了叫潛水艦的東西了。潛水艦是潛在水中而攻擊敵

人的軍艦。雖然名爲潛水艦，但也不是僅僅潛在水中的。平常時候在可能範圍以內，總是浮在水上行走的，一則要常常放人新鮮的空氣，二則因為浮在水上行走，能快一點的緣故。而接近敵方的時候，就潛入水中爲的不是讓敵人發見。潛水艦也能單獨駛過大洋，也能一整日的潛着在海中。潛水艦潛在水中的時候，就用一種叫做潛望鏡一的長管，若將它伸出

水面，就可以自由地看到四處。潛水艦駛近敵艦。就用魚雷擊沉它，有時也有偷入敵人的港內，出其不意，攻擊敵人，又有時對於弱小的敵艦，不潛水而浮在水上，用大砲和魚雷擊沉它。潛水艦的唯一可怕的敵人，是飛機和驅逐艦，被飛機發現被它擲炸彈，或被速度快的驅逐艦追趕的時候，是很危險的。還有時候，敵人在海中敷設很

粗的鐵絲編的網，若一不留神，碰到了它，就會像魚一般的，被它生擒了。

#### 十四、有望的青年

有一家公司招收職員了。志願人雖有五十人左右之多，但是經理錄取了一個青年，除了那青年之外，帶來名人的介紹書，或有很高學歷的人也不少，有一個人便向他說：

「你以怎樣的眼光，而錄用了那個青年？」

經理答道：

「那青年進我的屋子的時候，開門關門都很輕輕不慌不忙。講話時，有一個老人進來，那青年立刻就站了起來，讓了位。說應酬話時也很恭敬客氣，一點也沒有冒失的地方，無論問他什麼，總是很清楚地回答，而且不說過多的話。牙齒也刷得很乾淨。指甲也修得很短。最後我問他：『你想做什麼樣的

事情？』他就說：『什麼都好，我只想請您給我做最吃力的事情。』不論是他看他的態度，或是問他的思想，我總覺得這個人是有希望的青年。」

### 十五、雪舟

是雪舟在孩子時候的話。做了小和尚沒有多少時候的一天，就被和尚大罵了一頓。

「你又任畫畫嗎？無論怎樣說你，你盡是畫着畫，

一點也不記佛經，你這個人，儘拿嘴說你是不行的  
「唷！」

和尚一面這樣說着，一面把他拉到大殿裏去了。

雪舟就被綁在大庭柱上，起初盡是覺得很害怕，但是被綁在冷冷靜靜的大殿的庭柱上，一點也不動的時候，雪舟就繼續想起心事來了：

「我雖然常常念念念經，但是一向着檯子，就要被畫畫的癡兒所佔住。明天

起一定要拚命學經，好快一些成一個偉大的和尚，我在這裏這樣的被責備，恐怕爸爸和媽媽連夢中也不會想着吧！」

一想起這樣的事情，雪舟便悲傷地終於哭了出來。淚水不斷地溢出來。簌簌地落了下來，把大殿的地板也弄濕了。哭得稍感疲倦時，呆呆的望了望腳底下，雪舟就無意地用腳的大姆指，玩弄了落在地板上的淚水。

於是剛才似乎悲傷着的雪舟的臉，漸漸地就眉開眼笑起來了，雪舟是用大姆脚指用淚在地板上畫起畫來的。

回到自己屋子裏去的和尚隔了一會兒，覺得雪舟太可憐了，想要饒了他，於是又到大殿裏來了。將近傍晚，大殿裏有些暗了。他想雪舟一定很寂寞吧，無意的一看，突然大吃一驚，原來在雪舟的腳底下正有一隻大老鼠，好像要跳到他身上似的。若

是咬着了那就太可憐了，和尚這麼想着，就「噓噓」地趕了，但是希奇得很，老鼠竟一動也不動，走近一看，才知道原來不是活的老鼠，而是雪舟用淚水畫了的。和尚就吃驚了。連忙替他將繩子解掉，然後說道：「是我錯了，以前不知道你能畫得這麼好的畫，你還是做一個畫家好！」雪舟就滿面帶着喜色。自那次以後雪舟就一心一意



地學畫，同時對於學問也下功夫，結果終於成了日本第一的畫家。

### 十六、明年歲數相同(笑話)

有一個八歲的孩子。有一個人搬到他的鄰家來了。他就和那家的孩子做起好朋友來了。

「你幾歲？」

「我七歲。」

「因為是七歲，那末到了明年，就和我同歲了，是不是？」

### 十七、滑冰

因為正是寒假的時候，就哥哥到山中湖來了。

今天早晨風也沒有，天氣很溫和，早晨一早起來就去滑冰了。一到湖，已經來了有更多的人。如鏡子一般的冰上，有黑影縱橫的跑着。太陽還沒有出來。仔細一看，也有二三個同宿的人在那兒，我們便一同起勁地滑冰。也有兩臂交在身後，灣着身體，像箭一般很快地滑着的

人。也有張開着兩手用一隻脚，一面滑走，一面滑着圓圈的人。

滑了一會兒，覺得渾身有些熱起來了。

「呀！朝陽！——有人這樣叫了。突然亮起來了，朝陽照來了，是美麗的朝陽！

被雪蓋着的雪白的富士山受着朝陽的光，發着薔薇色的光輝。

我們處在這樣太美麗的風景中，竟忘了滑冰而眺望景色

了。

### 十八、日本歲時記

逢年過節的禮俗，是任何國都表示各自的風俗習慣。

大則依其國家而不同，小則依其地方而不同，因此各有它的特色的。

這些禮俗，是在各國從古代傳下來的，可是也有時規定新的禮俗。

在日本有很多的這種禮俗，現在將其主要的舉出來吧。在元旦參拜神社，家裏的人都

吃雜羹（年糕和各樣菜一同羹），飲屠蘇酒，以慶祝新年。以門松（把松竹梅立在門前或釘在門上）裝飾的街道上，熱鬧地往來着賀年的人，與親戚朋友互相寄遞賀年片，也是新年中的樂事。在二月節分的時候，總要撒豆，一面大聲喊着：「福氣進來！魔鬼出去！」一面將豆撒布，於是孩子們便很快活地轉來轉去的拾着。三月三日是桃花節，是女孩

子所渴望的一日。在雛壇上飾着雛泥人（三月節女孩擺在壇上的泥人。）女孩子就在那壇前玩得很快樂，我們看去，她們是非常高興的樣子。在春分與秋分前後的一星期間，各各名爲：「春の彼岸」「秋の彼岸。」家家都祭祖。寺廟則舉行盛大的佛事，拜佛的人很擁擠，所以十分熱鬧。日本被稱爲「櫻花國」，果

然名不虛傳！到處都有以櫻花出名的地方，櫻花一開，什麼地方都擁擠着看櫻花的人。

五月五日，是端午節。爲了男孩子，擺列泥武人，供着柏餅（用一種很寬的樹葉所包帶豆沙餡的點心）或粽子，鯉魚轍在新綠的樹葉上雄勇地飄翔着。

一入了六月裏，鄉下便開始插秧，男的女的，都在一塊兒一面唱着插秧歌，一面插

秧。

大約在插了的秧長得差不多的時候，螢火蟲就飛起來了。

七月七日，是七夕節，在五色的紙上，寫着和歌（日本詩之一種，如用假名寫共有三十一字）等，繫在竹枝上，以祭星宿。

七月十五日，是盂蘭盆節會。家裏點美麗的燈籠，拜祖先的坟墓，寺院和神廟等的廣場上，都聚集着人山人海的人們，合着笛和大鼓等的調

子，跳盆舞。（七月節的跳舞）

一入了九月裏，就慢慢地開始割稻了，秋天忙着收獲的事，也須經過好一些時候。舊歷八月十五看月亮，也是秋季中的主要習俗。

市鎮裏和鄉村裏祭神廟也大約在這時舉行，街上掛飾旗幟和提燈等，神轎就在那裏兜來兜去。

十月十一月是菊花盛開，而又是看楓葉的好時候。一到

了年底，就要忙了。家家都得揮烟塵以打掃房屋，或舂年糕或立門松等準備迎接新年。

日本和中國，是同樣的東亞的國家，所以日本的逢年逢節的禮俗與中國的禮俗，有不少相同的地方。

上海图书馆藏书



A541 212 0015 6873B

中華民國三十一年二月初版  
中華民國三十一年十月三版

定價每冊國幣壹元六角

國定  
教科書

初中日語 五

編纂者 教育部編審委員會

印刷者 華中印書局

上海大連灣路一三〇號

分銷處 全國各大書局

